# 「向学の熱」

令和４年度　竜北中学校　学校便り　第９号
文責　校長　髙橋　博之
学校ホームページ https:// jh.higo.ed.jp/ryuhoku/

## 「プールを歩いて渡った少女」　～本当の“勇気・強さ”とは～

ある町に住む女子高校生のＡ子さんは、小さい頃の病気が原因で足が悪い女の子でした。

そのＡ子さんが通う高校では、毎年７月のプール開きの日に、クラス対抗１００メートル水泳リレー大会をしています。男女２名ずつそれぞれが、２５メートルを泳ぐ競技です。Ａ子さんのクラスでこの大会の出場選手を決めていた時、女子１名がどうしても決まりませんでした。早く帰りたいクラスのある男子が「Ａ子はこの３年間、体育祭、水泳大会に一度も出ていない。最後の３年目なんだから、お前が参加しろ」といじわるなことを言い出しました。Ａ子さんは誰かが味方すると思ったけれど、他の生徒は何か言えば自分が泳がされると思い、みんな口をつぐんでいます。男子生徒も発言した男子のグループに憎まれたくないから、何も言いませんでした。そして、結局泳げないＡ子さんが選手になったのです。

彼女は家に帰り、お母さんに泣きながら訴えました。するとお母さんは「お前は来春就職して、その会社で何かできない仕事を言われたら、また泣いて私に相談するの？そしてお母さんがそのたびに会社に行って、うちの子にこんな仕事をさせないでくださいって言いに行くの？」そう言って怒り、Ａ子さんを突き放しました。

Ａ子さんは部屋でしばらく泣きはらし、そして、２５メートルを歩いて渡る決心をし、そのことをお母さんに告げに行きました。するとお母さんは仏間で「Ａ子を強い子に育ててください」と、必死に仏壇に向かって祈っていました。

水泳大会の当日、プールを歩くＡ子さんを見て、まわりから笑い声やひやかしの声が響きました。彼女がやっとプールの中ほどまで進んだその時、一人の男の人が背広を着たままでプールに飛び込み、Ａ子さんの隣のコースを一緒に歩き始めたのです。その高校の校長先生でした。「何分かかってもいい、先生が一緒に歩いてあげるから、ゴールまで歩きなさい。恥ずかしいことじゃない、自分の足で歩きなさい」そういって励ましてくれたのです。一瞬にしてひやかしや笑い声は消え、みんなが声を出して彼女を応援し始めました。長い時間をかけて彼女が２５メートルを歩き終わった時、友達も先生も、そしてあのいじわるな提案をした男子生徒たちも皆泣いていました。

【『夢の卵の孵し方・育てかた』仲田勝久著、致知出版社より】

嫌でも、泳げなくても選手と決まった以上、周りの冷ややかな嘲笑の中、歩きとおしたＡ子さんの姿は立派です。 それ以上に、Ａ子さんのお母さんはすごいと感じました。子どもが、社会に出て生活・仕事をしていくうえで、いろんな壁に当たることが想像されます。その時に「できない」と言って逃げるのではなく、何らかの方法を考え、その壁を乗り越えていく『たくましさ』『勇気』『強さ』を身に付けさせなければならないという信念を持って、Ａ子さんを育てているのでしょう。改めて、『子育てとは・教育とは、何をゴールに見据えて行うべきものか』考えさせられました。（是非 、ご家庭でも話題にしてみて下さい。）

## 故郷の誇りを胸に ～駅伝選手結団式～

郡市対抗女子駅伝、郡市対抗熊日駅伝の選手結団式が、１月２４日に文化センターで行われました。本校からは、藤本悠花・岩城心・藤本理杏・山本百日花・富田薫・長尾芽依・緒方渓心・山本暁仁・田中清雅・平山颯泰・岩本治輝が選出されています。女子は１月２９日、男子は２月１２日に大会が行われ、今年は３年ぶりに公道を使っての開催となります。故郷氷川町の誇りを胸に、精一杯の走りを期待しています。

【結団式で力強く選手宣誓をする田中清雅君（右）】

## 高校等　入試スタート

１月に入り、公立前期、私立専願・奨学等の入試が始まりました。これから２月末まで各学校の入試が続きます。生徒はもちろん、保護者の皆様も不安や緊張もあることでしょう。「夢を実現させるには、乗り越えなければならない壁が必ずある」 と思っています。

高校入試もその一つです。不安を解消するには日々の頑張りしかありません。また、スポーツの試合と同じように、試験会場という普段と違う場の雰囲気に飲まれず、自分の持てる力を発揮することが大事です。

コンディションを整え、事前準備を怠らず、“強い気持ちと志”を持って試験に挑んでほしいものです